⑭ 移民開拓の父　工野儀兵衛

五年生になった良子は、一度おじいちゃんに聞いてみたいと思っていることがありました。それは、三尾のバス停「アメリカ村」のそばに建てられている大きな立派な石碑のことでした。むずかしい漢字がたくさん彫りつけられているので、良子にはその字も意味も分かりません。

「いったいどんなことが書かれているのかな。おじいちゃんなら、三尾の昔のことはよく知っているから、きっと教えてくれるにちがいない。」

と、良子は思いました。

「おじいちゃん、停留所の近くに建っ

工野儀兵衛氏顕彰碑

ている石碑、あれ、どんなこと書いてあるんよ。」
日曜日の午後、浜で網のつくろいが終わって帰ってきたおじいちゃんに、良子はたずねました。
「うん、あれはな、昔、三尾に工野儀兵衛（くのぎへえ）という人がおってな、カナダのスティブストン（現リッチモンド市）にわたって苦労のあげく、三尾の人びとをおおぜい呼びよせたんや。自分を忘れて、人びとのためにつくした立派な行いを、いつまでも忘れないように、そして、その行いをたたえようと、三尾の人びとや、カナダに行っている人びとによって、昭和六年に建てられたもんや。」
そう言い終わると、浜から持ってきたえび網を片づけました。
良子は、
「工野儀兵衛のこと、もっと教えてよ。」
と、おじいちゃんに言いました。
おじいちゃんは、次のような話をしてくれました。

三尾は、昔から土地がせまいうえに、田畑が少なく、風のたいへん強いところでな、漁師は、漁に出られん日が多かったそうだ。そのために、遠く関東方面まで漁に出かけたそうだ。また、江戸時代には、地震や津波、台風などの大きな被害を受けたり、飢饉のためにたいへん苦しんで、笹の実や根を粉にして食べたということも記録に残っている。明治になってからも、漁場のあらそいなどがあって、くらしはいっこうに楽にならずに苦しい生活であったそうだよ。

そのころ、三尾に工野儀兵衛という若い大工さんがいてな。働き者のうえに、腕もよく、家を建てるほか、土木工事などもやったりして、村のために働いていたそうだ。明治十六年ごろ、村では防波堤を造ることになり、儀兵衛もその仕事を

三尾の全景

したいと考えた。ところがな、うまくいかず悩んでいたそうだ。
そんなとき、船員をしているいとこから、カナダへ行かないかとさそわれた。
「そうだ。外国に出て、防波堤を造るお金をもうけよう。」
こんなことを、真剣に考えるようになったのだ。儀兵衛という人は、小さいときからとても負けずぎらいの、心の強い人であったそうだよ。
一度思い立つと、実行せずにはいられない儀兵衛のことだ。明治二十一年三月、家族を三尾に残し、カナダ航路の船員をたずね、八月、カナダ・ビクトリア行きの船に乗り組むことに成功したのだ。
良子は、じっとおじいちゃんの話に聞き入っています。
「それから儀兵衛はどうしたの。」
それからな――三十日もかかってバンクーバーに着いたが、そのころのバンクーバーは、小さな町だった。儀兵衛はその近くのスティブストンに住み、フレザー河をさかのぼる鮭の大群を見て、自分の兄弟、親類、そして三尾の人びとを呼びよせたのだ。しかし、言葉も習慣も、気候もちがったくらしは、たいへんなことにちがいなかった。

そのうち、儀兵衛の人柄（ひとがら）は、土地の人たちから信用されるようになり、毎年、その儀兵衛を頼ってカナダに渡る人がふえ、大正の終わりにかけて千人もの人が渡ったそうだ。このころが移民の一番盛んなときだったと、おじいちゃんは聞いている。

「この広いカナダに希望がいっぱいある。三尾の人びとを呼んでやろう。」

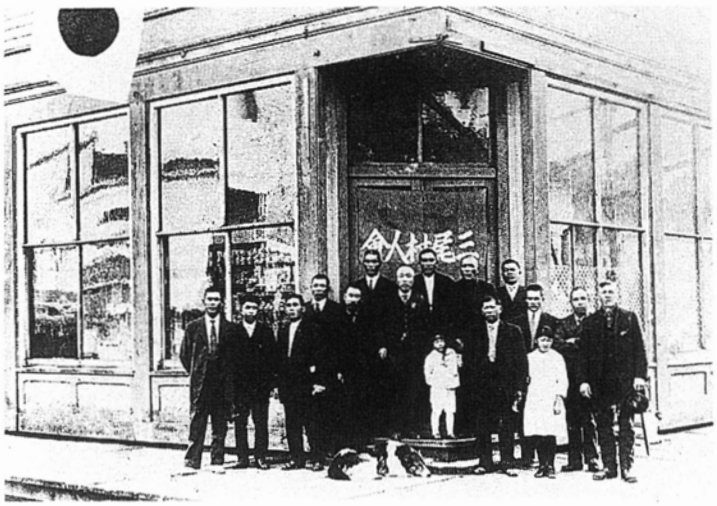
儀兵衛はそう考えたにちがいない。

それからも移民する人がふえてな、おじいちゃんはくわしい数字はおぼえていないが、現在までに三尾からカナダへ渡った人の数は三千人と言われているよ。

だから、今も三尾のほとんどの家が移民とかかわりがあるんだよ。

「うちもカナダに親類があるのを、良子、おまえも知っているだろう。」

このように、カナダにわたって、二十三年もの長い間、人びとのめんどうを



カナダ三尾村人会（スティブストン）明治33（1990）年

見たり、仕事の世話をしたりしてつくしたのだが、儀兵衛は、とうとう病気になってしまい、故郷に帰り、大正六年、六十三歳でなくなったんだよ。

儀兵衛はなくなったけれど、移民の父として仰(あお)がれ、カナダにいる三尾の出身者（三尾村人会）や三尾の人たちが、これを後々(のちのち)に伝えていくため、儀兵衛の生まれた家の近くに、記念碑が建てられたんだ。

工野儀兵衛

この碑のことを良子は、はじめにおじいちゃんに聞いてくれたんだったな。

このように、自分のことよりも人びとのために働いて、生涯を終えた儀兵衛の生き方は、移民開拓の父としていつまでも伝えられ、受けつがれていくことだろうとおじいちゃんは思うよ。

良子は、おじいちゃんの話から、やっと石碑のことが分かり、聞いてみたいと思っていたことが分かって、胸がすっとした気持ちになりました。

「おじいちゃん、ありがとう。この話、いつまでも忘れんようにするよ。」